

2012年度 活動報告(4月～6月)

Activity Report (Apr - Jun 2012)

■講演会・ワークショップ等■

- 6月1日 国際日本研究センター主催 報告会
「ヨーロッパの日本語教育事情—イギリスを中心として—」
坂本恵氏（東京外国語大学・国際日本研究センター副センター長）
- 6月12日 国際日本研究センター主催 第5回若手研究者ワークショップ
「日本語との対照によるモンゴル語構文論の試み」
飯田純氏（東京外国語大学博士後期課程単位取得退学）
- 6月28日 社会言語部門主催 講演会「方言コスプレ」とは何か？
田中ゆかり氏（日本大学）

■会議歴■

- センター会議：2012年 4月12日、5月18日、6月14日
- 部門会議：2012年 4月19日、25日、26日、5月7日、24日、6月21日

■ Symposia and Lectures ■

- 1 June: *Debrief Session "Japanese Language Education in Europe; focusing on the current situation in U.K."*
by Megumi SAKAMOTO, Tokyo University of Foreign Studies(TUFS), Japan
- 12 June: *The 5th Young Scholars Workshop "Contrastive study of Japanese and Mongolian construction of sentences"*
by Jun IIDA, Ph.D. Candidate, TUFS, Japan
- 28 June: *Lecture: "Dialect Cosplay" Defined ?*
by Yukari TANAKA, Nihon University, Japan

■ Meetings ■

- Center meetings: 2012 - 12 Apr., 18 May, 14 Jun.
- Division meetings: 2012 - 19, 25 and 26 Apr., 7 and 24 May, 21 Jun.

イベントスケジュール

Future Events

7月10日(火) 17:45—19:30 Tue. 10 Jul.	国際日本研究センター主催 特任研究員ワークショップ 講演者：ハーネム・アハマド氏（カイロ大学） 葉淑華氏（国立高雄第一科技大学）	<i>The 1st ICJS Joint Researchers Workshop</i> Speakers: Hanan AHMED, Cairo University, Egypt YEH Shu-Hua, National Kaohsiung First University of Science and Technology, Taiwan
7月18日(水) —20日(金) 10:00-17:00 Wed.18 —Fri.20 Jul.	国際日本研究センター主催夏季公開セミナー 2012 「言語・文化・教育—国際日本研究の試み」 講師：趙華敏氏（北京大学外国語学院）中国／徐一平氏（北京外国語大学）中国／蕭幸君氏（台湾東海大学）台湾／尹鎬淑氏（サイバー韓国外国語大学校）韓国／任榮哲氏（中央大学校）韓国／三宅登之氏、山口裕之氏、望月圭子氏（東京外国語大学）	<i>Summer Seminar 2012 "Language, Culture, Education: Approach to a Construction of International Japanese Studies"</i> Lecturers: ZHAO Hua Min, Peking University; XU Yi Ping, Beijing Foreign Studies University; HSIAO Hsing-Chun, Tunghai University; YOUN Ho Sook, Cyber Hankuk University of Foreign Studies; YIM Young Cheol, Chung-Ang University; Takayuki MIYAKE, Hiroyuki YAMAGUCHI, Keiko MOCHIZUKI, TUFS
7月21日(土) 12:00—14:45 Sat. 21 Jul.	対照日本語部門主催： 「外国語と日本語との対照言語学的研究」第7回研究会 発表者：上田博人氏（東京大学）、小川暁夫氏（関西学院大学）、伊藤英人氏（東京外国語大学）	<i>The 7th Research Seminar "Contrastive Study for Japanese and Other Languages"</i> Lecturers : Hiroto UEDA, Tokyo University; Akio OGAWA, Kwansei Gakuin University; Hideto ITO, TUFS
7月21日(土) 15:00—16:45 Sat. 21 Jul.	国際日本語教育部門主催第4回ワークショップ 「タイ語母語話者への日本語教育」 講演者：タサニー・メーターピシット氏、スニーラット・ニャンチャローンスク氏（タマサート大学）タイ、モンコンチャイ・アッカチャイ氏（東京外国語大学大学院博士後期課程）	<i>The 4th Workshop "Japanese Language Education for Thai Native Speakers"</i> Lecturer : Tasanee METHAPISIT, Suneerat NEANCHAROENSUK ; Thammasat University, Akrachai MONGKOLCHAI, TUFS

ジャーナル『日本語・日本学研究』論文公募のお知らせ

Call for papers “Journal for Japanese Studies”

- 日本の文化・社会・歴史並びに日本語・日本語教育に関する研究論文（20ページ程度、400字×60枚）、海外の研究動向・研究潮流の紹介（20ページ程度）、研究ノート（10ページ程度）、書評（1ページ）
- 原稿の書式：寄稿・投稿論文は日英いずれかの言語とする。日本語論文には、英語の概要（300語程度）、英語論文には日本語の概要（800字程度）をつける。
- 投稿エントリーとエントリー締め切り：論文の投稿を希望する場合は、指定の期日までに、下記編集委員会アドレスにEメールで投稿予定の旨を連絡すること。メール本文 には、氏名・論文の題名（仮題でもよい）・所属機関名（該当者のみ）、および連絡先（住所・電話番号・メールアドレス）を明記すること。また、メールのSubject（件名）には『『日本語・日本学研究』投稿希望』と記入すること。
- 公開、複製、公衆送信に関する権利：掲載された論文等の公開、複製、公衆送信の権利は、本センターに帰属する。本誌に発表されたものを転載する場合は、その旨を編集委員会に連絡して承認を得るとともに、当該論文等の初出を明示すること。また、掲載された論文等は本センターのHP上で公開される。
- 【指定期日】投稿希望連絡締め切り 2012年7月15日必着
投稿論文締め切り 2012年9月末日必着
- 【連絡先】東京外国語大学 国際日本研究センター
『日本語・日本学研究』編集委員会
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
電話/FAX：042-330-5794 E-mail：icjs-editorial@tufs.ac.jp
URL：http://www.tufs.ac.jp/common/icjs

- Topics:** Research article on Japanese culture, society, history, language, and language education (double space, approx. 20 pages,) international research trends (approx.20 pages,) research report (approx. 10 pages,) book review (1 page.)
- Format:** The articles may be written in Japanese or English. For articles in Japanese, attach a summary in English (approx. 300 words,) and for articles in English, attach a summary in Japanese (approx. 800 letters.)
- Policy Acknowledgement:** All rights relating to the publication, reproduction, and public transmission of the articles published on the journal shall belong to the International Center for Japanese Studies. Any contents shall not be reproduced without showing the credit, first appearance of the article, nor the express written permission given by the editorial committee. In addition, the articles of the journal will be published online at <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/en/>

【Deadlines】Deadline for Journal entry is July 15th, 2012
Deadline for Submission is September 30th, 2012
【For further information, please contact】

Journal for Japanese Studies Editorial Committee,
International Center for Japanese Studies, Tokyo
University of Foreign Studies

【Address】3-11-1, Asahi-cho Fuchu-shi,
Tokyo 183-8534 Japan
Telephone and Fax : +81 (0) 42-330-5794
E-mail : icjs-editorial@tufs.ac.jp
URL: <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/>

国際日本研究センター

NEWS LETTER

ニューズレター

08

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies
<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs>

2012.6 No.

- ・国際シンポジウム「国際日本学の構築に向けて」開催
Report: International Symposium “Towards a Construction of International Japanese Studies” P1～2
- ・2012年度 各部門方針 Divisions Policies in AY2012 P2～3
- ・〈特別寄稿〉日本研究の現状と課題：北米大学図書館からの提言
Current Status and Issues in Japanese Studies: from a Library in North America P3
- ・活動報告・イベントスケジュール・ジャーナル『日本語・日本学研究』論文公募のお知らせ
Activity Report・Future Events・Call for papers “Journal for Japanese Studies” P4

国際シンポジウム「国際日本学の構築に向けて」開催 2012年3月23日(金)・24日(土)

Report: International Symposium “Towards a Construction of International Japanese Studies” Fri-Sat. Mar 23-24, 2012



【講師の先生方（左上から時計回りに）林氏、徐氏、白岩氏、任氏、金氏、藤村氏、キタハラ氏、趙氏、ユン氏、陳氏、ショウ氏、ウィーラワン氏、菅長氏】

2012年3月23・24日、国際日本研究センター主催国際シンポジウムが開催された（於、アゴラ・グローバル1階、プロメテウスホール）。シンポジウムは4つのセッションから構成された。①「日本語教育における『日本学』」、②「日本学の方法論をめぐる：比較対照の観点から」、③「デジタルネットワークと日本語・日本学」、④「移動と定着を巡る日本—紐帯としての日本語」。ゲストは中国、台湾、韓国、タイ、ブラジル、そして国内から、日本語・日本学の研究と教育をリードしている14名。国際日本研究センターは、2010年3月に、15ヶ国・地域から20名、国内から3名のゲストを招いて「世界の日本語・日本学—教育・研究の現状と課題—」と題した国際シンポジウムを開催している。今回のシンポジウムは、世界の日本学の現状を共有することを目的とした前回のシンポジウムから2年を経て、国際日本研究センターの道のりを踏まえ、これからの研究・教育ネットワークを確かなものにすることを目標とした。会場で回収されたアンケートでは、「こうしたシンポジウム、コンソーシアム、世界的な交

流は必要」「日本語・日本学の領域の広さを痛感」「中国、韓国、タイなどの研究者の発表を一日で聞けるチャンスはよかった」などの感想や、近年の日本学にみられる実用性志向、言語教育のコミュニケーション方向へのシフトなどにも関心が寄せられていた。シンポジウムの最後には野本センター長から、今回のゲストを中心に、ジャーナル『日本語・日本学研究』の国際編集顧問を募ること、また、ゆるやかな国際コンソーシアムを形成したい旨の提起がなされた。シンポジウム開催中にはアゴラ・グローバルの一階を利用して国際日本研究センターの各部門によるポスターおよび作成中のデータベース、映像教材などのデモンストレーションも行われた。二日間の延べ参加者は85名。なおシンポジウムの報告書は本年7月に発行される。（友常勉）



プログラム (3月23(金)～24日(土) 附設展示会)	
■ 3月23日(金) ■	
セッション1) 日本語教育における「日本学」 「俳句による日本語・日本文化教育の実践」 「タマサート大学の日本語教育における『日本学』」 「台湾における日本研究の現状と展望—政治大学を中心に—」 「韓国における日本文学教育の現状と展望」	菅長理恵 (東京外国語大学) 日本 ウィーラワン・ワシラディロク (タマサート大学) タイ 于乃明 (国立政治大学) 台湾 金鍾徳 (韓国外国語大学校) 韓国
セッション2) 日本学の方法論をめぐる：比較対照の観点から 「研究成果と日本語教育の応用について—依頼という言語行為の日中対照研究を例に—」 「(他者) と対話する可能性を求めて——台湾東海大学における日本研究への模索」 「『紅樓夢』と『源氏物語』における女性像—林黛玉と紫の上を中心に—」	趙華敏 (北京大学) 中国 蕭幸君 (東海大学) 台湾 陳明姿 (国立台湾大学) 台湾 徐一平 (北京外国語大学) 中国
■ 3月24日(土) ■	
セッション3) デジタルネットワークと日本語・日本学 「日本語のレベルに応じたeラーニング教材と教室授業との組み合わせ」 「日本語教育におけるe-Learning実践と日本語学習コンテンツ」 「日本語・中国語遠隔協働授業の実践」	藤村知子 (東京外国語大学) 日本 尹鎬淑 (サイバー韓国外国語大学校) 韓国 林俊成 (東京外国語大学) 日本
セッション4) 移動と定着を巡る日本—紐帯としての日本語— 「南米ボリビアにおける沖縄系移民の言語生活」 「『つながる日本』から『国際化する日本』へ—リオデジャネイロの日本語人からみる日本語・日本文化の紐帯力」 「在外韓国人社会における言語の実態調査をめぐる—共通韓国語の構築のために—」	白岩広行 (大阪大学) 日本 キタハラ高野純美 (リオデジャネイロ州立大学) ブラジル 任榮哲 (中央大学校) 韓国

On March 23 and 24, 2nd International Symposium “Towards a Construction of International Japanese Studies” was held at Prometheus Hall of Agora Global in TUFS. This was consists of four sessions and 14 guests, leading scholars of Japanese studies in China, Taiwan, Korea, Thailand, Brazil, and Japan. At the end of the symposium, Director Prof. Kyoko Nomoto proposed to ask the lecturers to organize International committee board for the Journal of Japanese Studies of ICJS, and to make an opened society for Japanese studies, centering on East Asian Universities and Institutes. We had 85 participants during those two days. A report of the symposium will be published in July.

寄稿

Impressions
on
Symposium

国際シンポジウム「国際日本学の構築に向けて」に参加して（感想）

東京外国語大学留学生日本語教育センター教授 藤森弘子

Professor Hiroko Fujimori, Japanese Language Center for International Students, Tokyo University of Foreign Studies

今回のシンポジウムは、言語教育への活用の可能性、インターネット社会を反映した教育実践の報告、異文化接触・異言語接触といった社会言語学的視点やコーパス言語学など多岐にわたった、幅広い視点で「日本学」研究を考える機会を与えてくれました。

特に印象に残ったのは、于及明氏のご発表です。台湾・政治大学では多くの学生が交換留学で海外に出ていくが、日本への短期留学者の中には日本語専攻以外の学生も増えているということ、逆に日本語学科の学生が必ずしも日本へ留学するとは限らず、米国で日本史、英国でインテリアデザイン・通訳翻訳課程などに進むこともあるという事例です。このようなグローバル化現象は、まさに国境や専門を越えて「日本学」が広がっていくことを示唆しているように思われました。

日本文化は「Jポップ・カルチャー」といわれるように、アニメやマンガが代表のように言われている現在、伝統的な日本文学はもう絶えてしまうのかと危惧されます。しかし、菅長理恵氏のご発表からそんな心配は無用だと感じました。学生たちは「俳句」をつくるという過程を通して日本的な感覚・表現方

This symposium provided an opportunity to think about research on 'Japanese Studies' from a range of diverse perspectives, such as sociolinguistics - the possibility of application to language education, report on teaching practice reflecting the Internet society, intercultural and interlingual contact, and corpus linguistics. Each presentation showed how 'Japanese Studies' have transcended national boundaries and specialties and are developing, and one of the ways in which education, i.e., understanding Japan through the discovery of individual culture through one's own participation, and culture can be integrated. (Hiroko Fujimori)

法を感じ、他者の気持ちに共感するという情緒面の教育にも貢献するという効果がみられたとのこと。学生たちがメタ言語的な説明で日本文化を知るのではなく、自らが参加することによる個の文化の発見をとおして日本を理解していくという、文化教育事情の一つのあり方を提示してくださいました。

次に興味深かったのは、デジタルネットワークと日本語・日本学のセッションです。eラーニングやウェブを通しての遠隔授業など、世界へ広げようと思えばあっという間にインターネットで日本語を発信できる時代になりました。しかし、ここで大切なのは、一方向型ではなく「双方向型」であるということです。藤村知子氏、林俊成氏の取り組みにあるように、教育は固定的なものではなく、教師と学生、学生同士の相互作用によって生まれる変容と自己・他者への気づきが重要であると言えるでしょう。（藤森弘子）

2012年度 各部門方針
Divisions Policies in AY2012

国際日本語教育部門

International Japanese Education Division

2010年度より「日本語学習者の母語・地域性を踏まえた日本語教育研究―国内外の日本語教育研究機関との協働的研究（英語・中国語・フランス語・アラビア語・タイ語）―」と題した3カ年プロジェクトを進めており、今年度は、7月21日に第4回ワークショップ「タイ語母語話者への日本語教育」を開催します。ワークショップでは、タマサート大学のスニーラット先生、タサニー先生をお招きし、タイ人学習者のための連想法ひらがな学習カードや、中上級レベルの学習者のためのマル

The Division is currently conducting a three-year project, entitled 'Japanese Language Education Research based on Learners' Mother Tongues (English, Chinese, French, Arabic, and Thai) and Regional Differences– Joint Research with Domestic and Overseas Japanese Education Research Organizations and will be holding a workshop 'Japanese Language Education for Thai Native Speakers' this year. In addition, a presentation on research on Japanese language education for native speakers of five languages, such as English and Chinese misuse corpus, analysis of misuse by French native speakers, analysis based on role play data of Arabic native speakers, etc., and surveys conducted under the 'Survey on Status of Japanese Language Education in Domestic and Overseas Institutes of Higher Education' are also scheduled to be completed with major exchange universities in this academic year. (Ryuko Taniguchi)

対照日本語部門

Contrastive Japanese Division

次の4つの活動を行う。①日本語と諸言語との対照言語学研究の文献情報データベース：これまでに、国内外の紀要・学会誌等について日本語とスペイン語・ポルトガル語・韓国語・中国語との対照研究文献の調査を終えリスト化した。今年度はこれをもとにデータベースを構築し、検索・閲覧・追加などが行えるようにする。また、英語・ドイツ語との文献調査もする。

The Contrastive Japanese Division has planned the following four directions: 1) Creating a document information database on contrastive research between Japanese and other languages. In this year, especially, based on the database, we are going to complete it for making it easier for research, reference and addition. 2) Research and data collection on bilingual dictionaries for Japanese and other languages. 3) Organize seminars on contrastive research between Japanese and other languages. 4) Research on Japanese language study overseas. We will visit Mexico, German and China in this year for interviews and discussions among scholars there. (Emiko Hayatsu)

チ・メディアの活用の紹介など教育活動の実践についてお話しいただきます。また、今年はプロジェクトの最終年度に当たり、英語と中国語の誤用コーパス、フランス語母語話者の誤用分析、アラビア語母語話者のロールプレイ・データに基づく分析など5言語母語話者を対象とした日本語教育研究の成果発表会も予定されています。さらに、本部門が取りまとめを行い、当センターの公式ホームページで公開されている「国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査」も、今年度中に主な交流協定校での調査が完了する予定です。これらは、世界の日本語教育を俯瞰しつつ各々の地域性を把握するための貴重なデータとなります。（谷口龍子）

②日本語と諸言語との対照辞書・文法書の調査・収集：国内外で刊行されている、日本語と諸言語との対照辞書及び文法書を調査し、可能な範囲で収集する。③日本語と諸言語との対照研究についての研究会の開催：7月、10月、12月に開催する。各回3名（学外者及び本学教員）が講演または発表を行う。参加者を含め、活発な議論ができる会をめざす。④海外の日本語研究事情の調査：日本語研究が行われている国外の大学（メキシコ、ドイツ、中国）を訪問して研究者と面談し、研究動向について意見交換する。（早津恵美子）

社会言語部門

Sociolinguistics Division

当部門では、日本語の多様性を探るというテーマの下に①講演会の開催②社会言語学文献データベースの作成③奄美群島でのフィールド調査を部門活動の柱としている。

①社会言語学の様々なトピックやその最新の研究成果を学部生などにもわかりやすく紹介することを目的とした講演会を、継続的に開催している。本年度も二回の講演会を企画しており、

We have been holding lectures where even beginners can understand the latest research achievements in sociolinguistics, and publishing booklets. This year we will organize two lectures. On the project of sociolinguistic literature database, we have completed the basic construction and design, the production of a demonstration version, and are preparing ways to make it more practically applicable. Surveys and research on the Amami Islands will continue and we will further develop the surveys, and produce teaching materials and video recordings of the regional language of Amami, 'Shimaguchi.' (Tatsuro Maeda)

比較日本文化部門

Comparative Japanese Culture Division

国際連携推進部門

International Cooperation Division

2012年度の方針は次の通り。①“日本語で日本を学ぶミニ講義”の映像コンテンツの作成と配信。2010年度から海外交流協定校の日本語・日本研究の初学者を対象として、“日本を学ぶミニ講義”の映像コンテンツ作成を手掛けてきた。これまで食生活・自給率、芸能、神社と宗教、在日コリアン、夏目漱石と近代日本、異文化コミュニケーションなどのテーマで収録してきた。今後も継続してほかの先生方の協力をお願いしていく

2012 Joint Divisional Plans are as follows:1) Production and distribution of videos on “Mini-lectures on Studying Japan by Japanese.” 2) Support for surveys and research as “Binding Japanese-Japanese Society, Nikkei Community, Lifestyle language of “Japanese Language People,” a Grant-in-Aid for Scientific Research (B). 3) Organizing workshops and symposium for Construction of Total regime for Japan studies based on Japanese Language. Especially, we plans to organize a international workshop of “Transference and Literature of Modern Asians” in this year. 4) Making full use of the above to promote joint activities and to design the outline and network of “International Japanese Studies.”

〈特別寄稿〉日本研究の現状と課題：北米大学図書館からの提言

UCLA東アジア図書館司書 マルラ俊江

Current Status and Issues in Japanese Studies: from a Library in North America

本年から東京外国語大学国際日本研究センターは夏季公開セミナーを開催いたします。その開催にあたって、国際日本研究をとりまく状況を共有するために、今号では、北米大学図書館の現状について、UCLA東アジア図書館司書・マルラ俊江氏からご報告を寄せていただきました。

今北米の大学図書館は大きな転機を迎えている。これまで長年日本研究を影で支えてきたベテランの司書たちが次々と退職しており、世代交代を余儀なくされている。このような状況下、国際交流基金およびトロント大学図書館から資金援助を得て、若手日本研究司書を養成するためのワークショップが今年3月トロントで開催された。今回のワークショップは2日間の日程で行われたが、前回5日間にわたる同様なワークショップを北米日本研究資料調整協議会（NCC）が主催してから、ちょうど10年ぶりのことである。

北米では、教職でも司書職でも、前任者が辞職すると、そのポジションがそのまま保持されるとは限らない。現在のようにきびしい経済事情の中では、日本研究司書職が東アジア研究司

その内容をさらに広く知ってもらうために講演記録を文字化してブックレットを刊行する。②文献データベースは、基礎的な構築・設計が終わり、デモ版を製作して昨年度3月の国際シンポジウム附設展示会にてトライアルを行った。そのフィードバックを基に、より実用的なものを目指して整備を進める。③フィールド調査・研究については、これまでの調査の収穫である近代から米軍占領期にかけての資料群を足がかりにさらなる調査を展開する。さらに大島郡瀬戸内町で、地域言語「シマグチ」の教材および記録映像を作成する。（前田達朗）

予定。さらに海外提携大学での配信を試みながら、ミニ講義の時間を短縮・分割するなど、より使いやすく提携先のニーズに応えられるように改善していく。②科研基盤研究（B）「〈紐帯としての日本語〉日本人社会、日系コミュニティ、「日本語人」の生活言語誌研究」（2011年～2013年）をはじめとした調査・研究の支援。③「日本語を核とした総合的な日本研究体制の構築」のための講演会・シンポジウムの開催。今年度も「東アジアの文学と日本」の企画を継続して開催したい。さらに「近現代アジアの人の移動と文学」をテーマに国際研究会を開催したい。④以上をふまえ、国内外の日本研究状況調査、研究機関との連携をすすめ、「国際日本研究」のアウトラインとネットワーク構築を図っていく。（友常勉）

2012 Joint Divisional Plans are as follows:1) Production and distribution of videos on “Mini-lectures on Studying Japan by Japanese.” 2) Support for surveys and research as “Binding Japanese-Japanese Society, Nikkei Community, Lifestyle language of “Japanese Language People,” a Grant-in-Aid for Scientific Research (B). 3) Organizing workshops and symposium for Construction of Total regime for Japan studies based on Japanese Language. Especially, we plans to organize a international workshop of “Transference and Literature of Modern Asians” in this year. 4) Making full use of the above to promote joint activities and to design the outline and network of “International Japanese Studies.”

書職にとって代わられる可能性もあるし、実際北米には東アジア研究司書という肩書きで日本も責任範囲内とする司書はすでに相当数いる。また、小規模な大学では特に日本研究をサポートする司書が必ずしもいるわけでもなく、教員が自分で資料収集にあたるケースも稀ではない。

このように人材と予算が逼迫した状況下では、北米のみならず世界規模で図書館間の協力体制を強固にし共同で日本研究をサポートしていく姿勢が肝要であるように思われる。たとえば、ある種の研究資料の収集にあたっては図書館間で協定関係を結び、その中で重複収集はできるだけ避けるように調整すると同時に、利用の要望があった際には迅速に確実に提供することができれば、各館の負担は少なくとも全体として利用できる資料の幅は広がるのではないだろうか。

そして、各館がそれぞれに特徴のあるコレクションを構築することができれば、日本研究により資することが可能になるように思う。（マルラ俊江）



(Special article) ICJS will be holding open seminars from this summer. In relation to this, in order to have a common understanding on the situation surrounding international Japanese research, this issue will have a special report by Ms. Toshie Marra, the Japanese Studies Librarian from the UCLA East Asian Library, on the state of university libraries in North America.

University libraries in North America are reaching a turning point. With institutions facing pressing budgets and a lack of human resources, it is vital to adopt an approach to jointly support Japanese research through the firm establishments of cooperative structures not only among libraries in North America, but also among libraries around the world. For example, agreements between libraries could be established in the areas of collection development and resource sharing for certain types of resources. If each library commits in developing distinctive collections, avoiding duplicate efforts as much as possible and providing efficient services, I believe we could contribute more to Japanese studies. (Toshie Marra)